

## 法政大学自然科学センター一年報発刊に当たって

地果て、海 始まる処  
海に陽の 憩える処  
その姿 あたかも  
全欧州の 頭に戴く  
王冠のごとく  
我が祖国 ポルトガルあり

15世紀初頭、ユーラシア大陸西のはずれに位置する小国ポルトガルの人たちは、レコンキスタを終えた隣の強国スペインに押し出されるように、新天地を求めて大海へ乗り出していった。大航海時代の始まりである。その結果、それまで独立に発展し、交流が希薄であった東洋と西洋の歴史が密接に交わり始め、アメリカ大陸が発見され、世界史が一つに纏れていくようになる。

上に示した句は、16世紀のポルトガル詩人カモンエスの「ウズ・ルシアダス」という叙事詩から取ったものである。小国ポルトガルの、それでも誇り高さ当時の人々の心意気を、見事に表している。

2003年4月、法政大学自然科学センター (SRC) が発足した。全国的な教養部解体の流れの中、全国で最後の教養部解体の結果である。教養部で研究・教育活動を行っていた、生物、化学、物理学の研究者が作った組織であり、それぞれの分野で3名ずつの構成員での新たな出発である。

各分野の研究者は、それぞれ独自の高いレベルの研究活動を行っている。それを維持し、さらに高めるためにこのセンターは作られた。したがって SRC は研究のための組織である。

各研究者は、あまり良いとは言えない研究環境で、研究活動を続けている。大きな研究所の施設環境を望むべくもない。そして文系の大学の、教養教育を市ヶ谷各学部で担当している。この9名の所属学部は、それぞれ異なっているのだ。

しかし15世紀のポルトガル人が、悪条件を新たな発展に転化したごとく、我々も何か新しい役割を担っていると考えている。

今日本では理科離れの現象が、日本立国を危うくするとまで心配されている。文系の人たちは自然科学というと何か遠い世界の出来事だと考えているようだ。文系の人たちにとって、自然科学研究者は、アメリカの人よりも遠い存在であるかに見える。しかし翻って考えてみれば、理

系、文系という人のわけ方ほど人為的なものはない。20世紀の日本にだけ通用した、時間的にも空間的にも限られた、不思議な日本人のわけ方である。21世紀にはなくなってしまう考え方ではないだろうか？

我々は良い環境にいる。すでに理科離れをした学生に、自然科学を教えることによって、何故今の若者に理科離れが起きるのか、その原因を我々は考察することができる。そして一般の人、文系の学生、文系の研究者に自然科学の面白さ・大切さを伝え、自然科学が遠い世界のことではなく、ごく身近に存在することを理解してもらうこと、それも我々の重要な任務であると考えている。

15世紀のポルトガル人が、大航海に乗り出し、東洋と西洋の架け橋をかけたように、我々は文系と理系に橋をかける。独自の高い研究活動を続けながら。

この年報は、そのような我々の活動を記録し、報告するために新たに発行される。

法政大学自然科学センター長  
小池康郎